

第6学年 国語科学習指導案

日時	平成17年11月11日(金) 5校時
児童	6年 男4名 女6名 計10名
場所	6年教室
指導者	皆川昌枝

- 1 単元名 生き方や考え方を読み取ろう
教材名 「海の命」 立松和平

2 単元について

(1) 児童観

子どもたちは、これまでの国語学習の中で、さまざまな作品に出会ってきた。それぞれの学習で身につけてきた読みの力を生かして、あるいはそれらの作品と比べてこの作品を読んでいくこととなる。

6年生の子ども達は、素直で明るい子ども達が多い。発表場面では、憶することなく積極的に手を挙げ、自らの考えや思いを積極的に述べることのできる児童もいる。その反面、自分の考えや読み取った内容をまとめることを苦手としたり、考えや読み取りに自信が持てずに発表をひかえてしまったりする児童もいる。学級全体としては、人物の言動に注意し、それらが互いにどのように影響しあっているかについて思考をめぐらしたり、表現の細部にまで注意して読み、主題に迫る読みや主題について考えたりすることをあまり得意としてはいない。

(2) 教材観

本教材は、学習指導要領「C読むこと」の(1)のウ「登場人物の心情や場面についての描写など、優れた叙述を味わいながら読むこと」、そして第5学年及び第6学年の「読むこと」に関する指導目標「目的に応じ、内容や趣旨を把握しながら読むことができるようにする」能力を育てることをおもなねらいとしているものである。

本教材には、自然を舞台に、主人公の成長の姿が描かれている。一人の人間の成長には、周囲の人間の存在が大きく関わっていること、また、主人公「太一」にとっての海やクエのように、人間の成長の過程には何らかの影響を持つ事物や事象があることを気づかせてくれる教材でもある。さらに、それらのことを自分に置き換えて考え、自分自身を見つめ直すきっかけとさせるのに適した面も持っている。

構成については、登場人物「太一」の少年期から始まり、青年・壮年になるまでの生涯が、6つの場面構成で描かれている。それぞれの場面を貫いて流れるものは、一人の少年の、父親や師である与吉じいさたちが生きた海に寄せる熱い思いであり、父の死を乗り越え、父をしのぐ漁師を目指した成長の姿である。

またさまざまな人物の設定や「海の命」という象徴的な題名は、読み手が多様な視点で作品に入り込むことを可能にしている。一人一人が自分の思いを大事にしながら、じっくりと読み味わうことのできる作品である。

(3) 指導観

この教材では各場面ごとに、それぞれの登場人物の海に対する考え方が書かれている。この「海」に対する考え方を、単元を通じた課題として取り扱っていきたい。

単位時間の進め方としては、課題解決のために必要な視写文を見つけ、それまでに読み取ってきたことや自分なりに考えたことを書き込み、学び合う活動を通し、その時間の学習場面だけでなく、いろいろな事象との関わりを考えた全体的な読みの力をつけさせていきたい。その際、一人一人の読みのイメージを大切にしながらも、読み取りの根拠を明確にする指導を心がけたい。

主題の読み取りについては、海に対しての父の言葉「海のめぐみだからな。」や与吉じいさの「千びきいるうちに一びきとれば、ずっとこの海で生きていけるよ。」の会話文、瀬の主と対峙した場面、そして「海の命」という題が手がかりになると思われる。

3 単元の見どころ

登場人物の言葉や行動から、生き方や考え方を読み取り、「命」について考えることができる。

[国語への関心・意欲・態度]

- ・自然を舞台にたくましく成長する主人公の生き方に関心を持ち、「命」について意欲的に考え、自分自身を見つめ直そうとすることができる。

[読むこと]

- ・太一の成長と周囲の人々の生き方や考え方、海の命との出会いを叙述と関係づけながら読むことができる。

[言語事項]

- ・漢字の「音」「訓」などの複数の読み方に気をつけて、漢字を読んだり書いたりすることができる。

4 単元の評価規準

国語への関心・意欲・態度	読む能力	言語についての知識・理解・技能
・自然を舞台にたくましく成長する主人公の生き方に関心を持ち、「命」について意欲的に考え、自分自身を見つめ直そうとしている。	・太一や太一の成長に大きく関わった人々の言葉や行動・考え方、海の命との出会いの叙述に着目しながら読んでいる。	・漢字の音と訓など、複数の読み方に気をつけて、漢字を読んだり書いたりしている。

5 指導と評価の計画（全9時間）

次	時間	ねらい ・学習活動	評価規準（評価方法）		
			国語への関心・意欲・態度	読む能力	言語についての知識・理解・技能
一	1	・学習活動の見通しを持つ。 ・題名が表すものに気をつけながら全文を読み、初発の感想を交流する。	命について考えを広げたり深めたりするという単元の見通しを持つとしている。	「海の命」のあらすじを確認し、題名が表すものに気をつけながら読んでいる。	漢字や語句について理解している。 漢字の音と訓に注意して読んでいる。
二	2	もぐり漁師であった父の海に対する考え方を読み取る。		海に対する父の考え方を読みとっている。	
	3	「千びきに一びきでいいんだ。」という与吉じいさの海に対する考え方を読み取る。		与吉じいさの海に対する考え方を読み取っている。	
	4	与吉じいさの弟子になった太一の海に対する考え方を読み取る。		与吉じいさの死と太一の海に対する考え方を読み取っている。	
	5	海にもぐる太一を見ている母の海に対する考え方を読み取る。		太一の成長と母の海に対する考え方を読み取っている。	
	6 本時	巨大なクエにもりを討たなかった太一の気持ちを読み取る。		瀬の主に出会ったことによる、太一の考え方の変容を読み取っている。	
	7	太一が生涯誰にも話さなかったことについて読み取る。		千びきに一びきしかとらない太一の気持ちを読み取っている。	

三	8	太一にとっての「海の命」とは何なのかを話し合い、主題について考える。		「海の命」という題名が何を表しているかをとらえ、主題について考えている。	
	9	立松和平の他の作品「山のいのち」の感想を書き、交流する。		「海の命」と「山のいのち」を読み比べ、共通性を見つけている。	

6 本時の指導(6/9)

(1) 目標(読むこと) 巨大なクエを殺さなかった太一の気持ちを読み取ることができる。

(2) 本時の具体の評価規準

評価規準 (読む能力)	具体の評価規準		努力を要する児童(C)への 具体的支援
	十分満足できる状況(A)	おおむね満足できる状況(B)	
瀬の主に出会ったことによる、太一の考え方の変容を読み取っている。	今まで学習してきた、おとうや吉じいさの教えにふれ、海の命と思えたクエと共に生きていくことについて書いている。(ノート)	本時の学習場面から、クエを「おとう」「海の命」と思えたという気持ちを抜き出して書いている。 (ノート)	・文章に戻って、読み取るようにさせる。 ・クエをかたきとして見てはいないことを確かめ、クエとおとうをどのような点で結びつけたのかを考えさせる。

(3) 展開

段階	学 習 活 動	教師の支援・留意点	具体の評価規準と 評価方法
導入	1、本時の学習課題を確認する。	・太一にとってクエの存在は、おとうのかたき、討たねばならない相手であることを確認する。	
3分	クエを殺さなかった太一の気持ちを読み取ろう。		
展開	2、本時の学習課題に取り組む。 (1) 学習場面を音読する。 (P78L4~P81L2) (2) 課題解決に関わる文を見つけ、視写する。 「おとう、ここにおられたのですか。また、会いに来ますから。」 こう思うことによって、太一は瀬の主を殺さないですんだのだ。大魚はこの海の命だと思えた。	・クエに対する太一の心情の変化に気をつけながら読ませる。 ・討たねばならないはずのクエを「おとう」「海の命」と思うようになったことに着目させ、その時の太一の気持ちを読み取っていくことを意識づける。	
40分			

<p>展 開</p> <p>40 分</p>	<p>(3) 視写文に書き込みをする。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・おとう ・会いに来ますから ・瀬の主 ・大魚 ・殺さないで済んだ ・この海の命 など <p>(4) 書き込みを発表する。</p> <p>(5) 打つのをためらう太一の気持ちを考える。 太一が迷っているのが分かる文はどこですか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・この魚をとらなければ、本当の一人前の漁師にはなれないのだと、太一は泣きそうになりながら思う。 <p>(6) クエを殺さなかった太一の気持ちについて自分の考えを書く。 クエを殺さなかった太一の気持ちについて考え、ノートにまとめましょう。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・クエも「海のめぐみ」だから、殺してはいけない。 ・「千びきに一びき」をとればよいのだから、殺す必要はない。 ・クエは、海を守る存在だから殺してはいけない。 ・クエがおとうと思えたから殺さなかった。 ・クエが海の命と思えた。 ・クエの悠然とした様子に心を打たれた。 <p>(7) 考えを交流する。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・「太一の気持ちや考え方」「海の命」と結びつく言葉に、書き込ませていく。 ・さまざまな叙述に、注目することが予想されるが、子ども達の読みを大切にしていきたい。 <ul style="list-style-type: none"> ・叙述ごとにまとめながら発表させる。 ・子ども達の書き込みと、関連づけながら読み取りを進める。 ・クエの様子については、一の場面で父を破ったとされるクエとを結びつける表現をおさえる。 <ul style="list-style-type: none"> ・与吉じいさの「村一番の漁師だよ」という言葉も想起させ、打たなければ、という思いと、悠然としたクエを打ちたくないという思いで葛藤する太一の気持ちを考えさせる。 ・クエはおとうのかたき、漁師と獲物の関係ではなくなっていること、海のめぐみによって生かされている命と思うことで殺さなくてすんだことに気づかせる。 <p>支援</p> <ul style="list-style-type: none"> ・文章に戻って、読み取るようにさせる。 ・クエをかたきとして見てはいないことを確かめ、クエとおとうをどのような点で結びつけたのかを考えさせる。 <ul style="list-style-type: none"> ・自分の考えと比較しながら聞くようにさせる。 	<p>評価規準</p> <p>クエを殺さなかった太一の気持ちを考える。</p> <p>A：今まで学習してきたおとうや与吉じいさの教えにふれ、海の命と思えたクエと共に生きていくことについて書いている。(ノート)</p> <p>B：本時の学習場面から、クエを「おとう」「海の命」と思えたという気持ちを抜き出して書いている。(ノート)</p>
<p>終 末 2 分</p>	<p>3、本時のまとめをする。</p> <p>4、次時の学習内容を確認する。</p>		

十一月十一日（金）

海の命

立松 和平

学習課題

クエを殺さなかった太一の気持ちを考えよう。

青い目

岩そのものが魚のよう
百五十キロはゆづりにこえる

父を破った瀬の主

絵（クエ）

とらなければ



とれない

- ・ 本当の一人前の漁師
- ・ 全く動こうとしない
- ・ おとつのかたき
- ・ おだやかな目
- ・ おとつをこえる

視写文

「おとつ、ここにおられたのですか。また会いに
来ますから。」

「こつ無じつことによつて、太一は瀬の主を殺さない
で済んだのだ。大魚はこの海の命だと思えた。」

まとめ

- ・ クエも「海のめぐみ」だから殺してはいけない。
- ・ 「千びぎ」「ぴぎとればいい」のだから殺す必要はない。
- ・ クエはこの海の命だ。